

# 玉縄城跡(鎌倉市)

玉縄城跡の全域図/中央のピンク色のエリアが玉縄城跡の主要部分で、その外側のグリーン色のエリアは砦等の外曲輪として機能した



現地説明板を一部加工



JR大船駅西口に降りると、正面に大船観音が見えるが、この丘陵は岡本砦の一部となっていたようだ

 video







その手前を流れる柏尾川は城域の外堀として天然の要害になっていたらしい





大船駅から歩くこと約30分、玉縄城跡の主要部分の丘陵が見えて来た！

 video





玉縄トンネルを過ぎると、左手に清泉女学院へのアプローチがり、その坂を登って進む

 video





ここが清泉女学院の正門/この中が玉縄城跡の本丸のエリア





その左手に蹴鞠場や諏訪壇へ登る石段がある/普段は手前のフェンスが施錠されており、ここに入るためには事前に学校側の許可をいただく必要がある





階段の登り口に立つ「玉縄城趾」と刻まれた石碑





事前に許可をいただいていたので、守衛さんが厳重に見守る中、石段を登る

 video



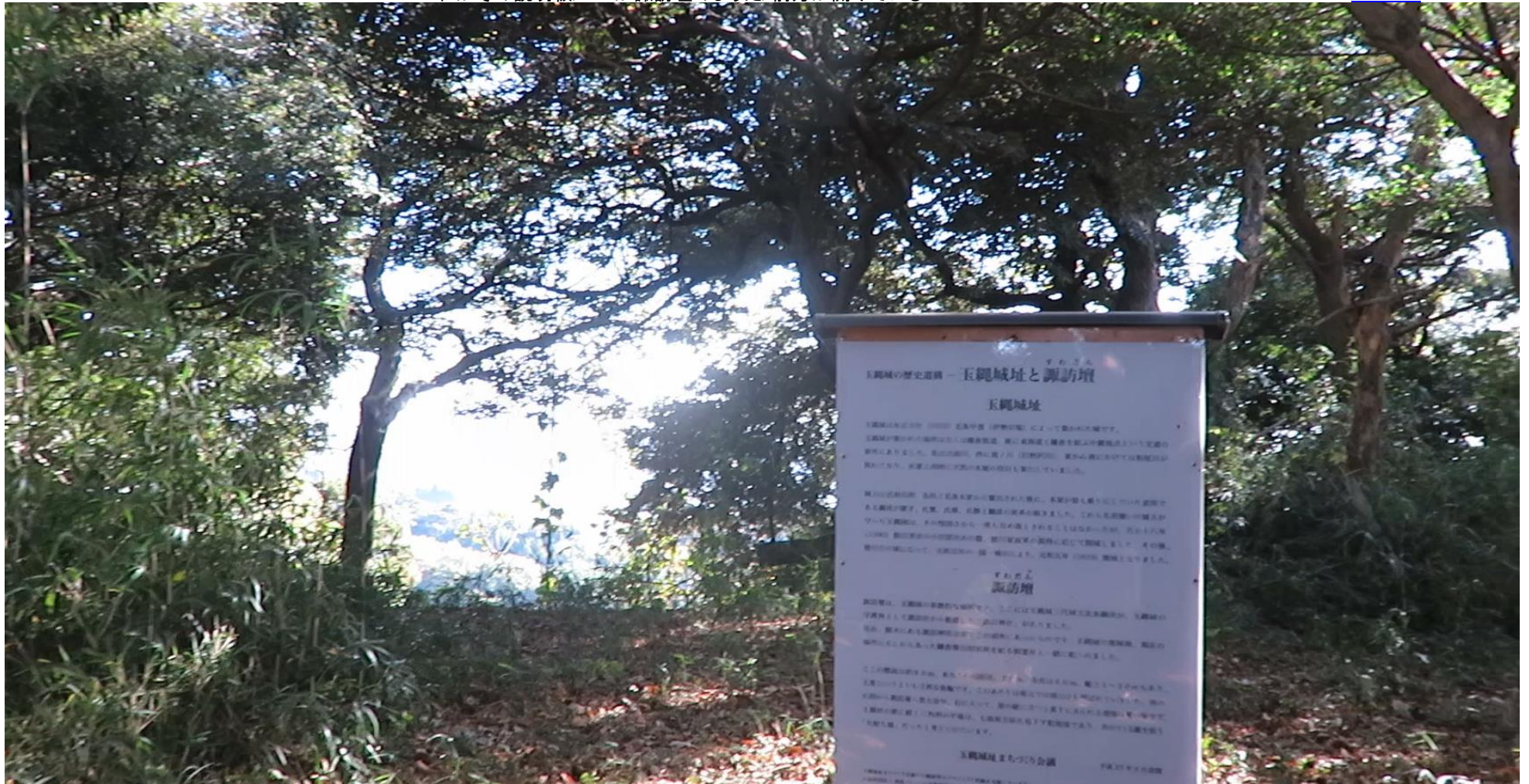


階段を登り切ると前方に説明板が立っているのが見える/手前の左側方向に蹴鞠場があるようだ



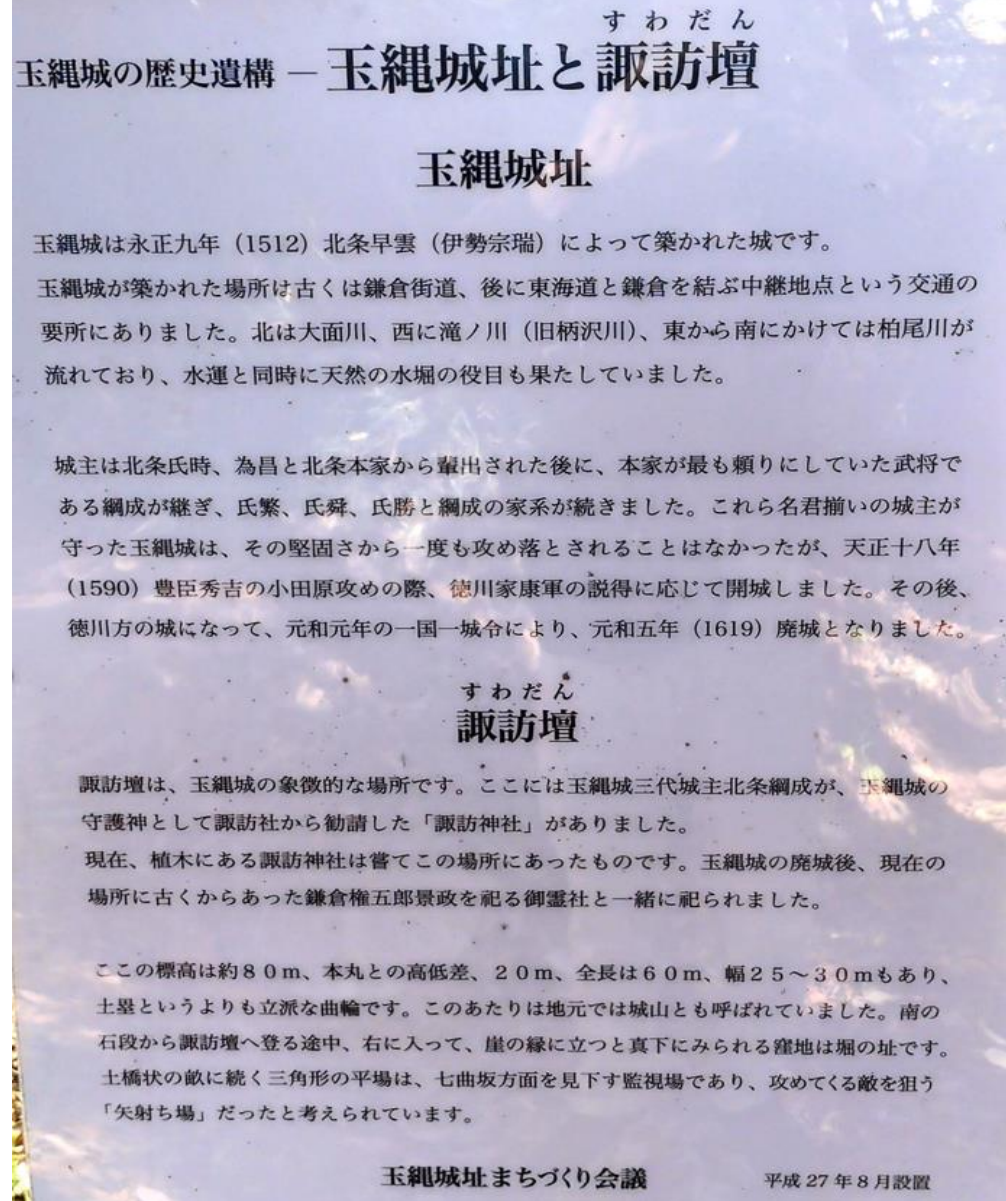


これがその説明板/ここが諏訪壇のようだ/前方が開けている





ここに玉縄城跡の守護神として諏訪神社が勧請されたと記されている/廃城後、諏訪神社は丘陵下の植木という場所に移されたようだ





前方の開けたところを見た様子/この下に豎堀が見えるようだが・・・





説明板の更にその先を見たところ





ここは諏訪壇への南側の石段のようだ





そこで左手を見ると、説明板が立っている

[video](#)





## 諏訪壇下の堀の址



南の石段から諏訪壇へ登る途中、諏訪壇の南側の真下に窪地が見られます。これは堀の址です。すっかり埋まっていますが現地に立ちますと地面がへこんでいることが分かります。崖側に土橋状の畝があり、その向こう側には下、向かって縦堀が掘られています。土橋から下を見ますと縦堀の底に三角形の平場が見られます。この三角形の平場は七曲坂を見降ろすためものです。



そこを進むと説明板の通り、土橋があった





そこで左手を見たところ





同じく右手を見たところ





これはその土橋の先を見下ろしたところ/豎堀があり、前方の三角形の平場は、七曲方面を見下ろす監視場であり、攻めてくる敵を狙う「矢打ち場」だったと云う





さて、次に七曲坂～大手門址～太鼓櫓跡～焰硝蔵址と進んでみよう





前方に七曲坂の登り口がある





正面に説明板が並んで立っている





# 玉縄城 八幡

歴史トレイル遺構案内

## 七曲坂と七曲殿

七曲坂は高低差40メートル以上のつづら折りの坂道です。登って中ほど右手に急斜面があり、その上を見上げたあたりに、坂を攻め登る敵に矢を射ちかける「矢射場」がありました。上と下につながる歴史遺構です。道の左側には武者だまりの曲輪、坂の突き当りには七曲古道の痕跡が残っています。さらに七曲坂を登り切った左側に、玉縄城の太鼓櫓址(植木1号市民緑地)があります。



昭和30年頃の七曲坂



2012年整備された七曲坂



七曲坂斜面地この上に矢射場がある

看板の右手前の植谷戸西公園からマンションのあたりに、玉縄城四代城主の奥方、七曲殿の館がありました。館の前には城の中心部へ向かう重要な道路も通っていました。

発掘調査された下の面は15世紀後半から16世紀前半まで、上の面は16世紀後半と推定され、2基のやぐらや掘立柱建物跡8軒、井戸5基、石垣状遺構1基、五輪塔の一部などが見つかりました。上の面の奥の遺構には茶室をふくむ多くの館址が発掘されています。

七曲殿は、夫の氏繁が亡くなると、若き五代氏舜、玉縄城最後の城主六代氏勝を補佐し、義父綱成が戦場にあるときは城主の役割も兼ねていました。(館の発掘調査の詳しい図面は右側の階段を上った公園の「玉縄城跡看板」にあります)



本丸東側の遺構群の縄張り図



七曲り南の開口部を望む



建物跡とやぐらと建物跡



水路の溝



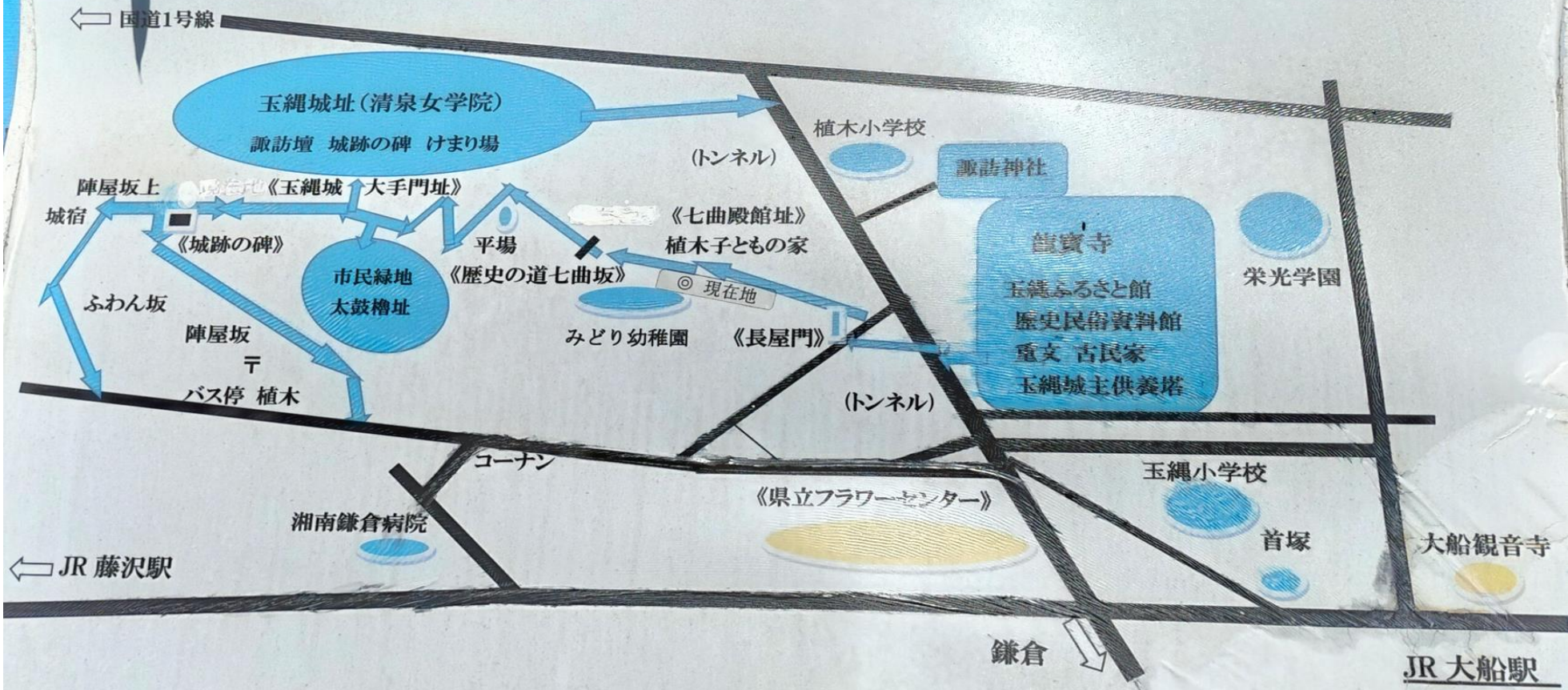
この七曲坂の登り口右手辺りに四代城主氏繁の奥方、七曲殿の館があったらしい



本丸東側の遺構群の縄張り図



# 【 鎌倉・玉縄城を偲ぶコース マップ 】





ここからが七曲坂





この左手が「武者たまりの曲輪」らしい

 video





何度も折れて登っている

 video





ようやく頂上に到着





さて、ここは大手門址(清泉女学院の裏門)/前方の上が本丸(清泉女学院の敷地)

[video](#)





# 玉縄城 八幡

歴史トレイル遺構案内

## ほんまる おおてもんあと 本丸大手門址

ここは現在、清泉女学院の裏門になっていますが、かつては玉縄城の大手門でした。正面の垂直の壁は大手門の掘割道を埋め戻しふさいだものです。元々は本丸に向かって土塁がまっすぐに伸び、その真ん中に道が通っていました。昭和期の発掘によって、大手門と馬出しを取り囲んでいた堀址が見つかっています。

現在正面にみえる階段を登り、本丸の平場(現在校庭)からさらに20メートル階段を登っていくと「諏訪壇」



玉縄城 大手門

に出ます。諏訪壇には七曲坂を守る矢射場やかつての諏訪神社があり、その先に蹴鞠場がありました。



玉縄城の古縄張り図 本丸は五角形



本丸跡の切り石積み井戸・堀断面



大手周辺の調査



大手門西側の堀



堀の中の切石敷きと石垣(橋脚か?)





少し右手に移動して本丸方向を見たところ





# 植木 1 号市民緑地

Ueki Ichigo Shimin Ryokuchi

「植木 1 号市民緑地」は土地所有者のご好意により、地域の方々が利用できる緑地として公開されています。大切にしましょう。

マナーを守りましょう



玉縄城は、永正9(1512)年、伊勢宗瑞(北条早雲)によって築かれました。天然の要害となる丘陵に空堀や土塁、曲輪などを加えた戦国時代の広大な山城で、「東国無双の名城」でした。当時をしのぶ地形は、七曲坂、太鼓櫓址、諏訪壇、ふわん坂などに残っています。玉縄城主として特に有名なのは不敗の名将、黄八幡の北条綱成です。その一門は玉縄衆と呼ばれ、鎌倉を守る役割を負っていました。天正18(1590)年、豊臣秀吉の小田原城攻めるとき、六代城主氏勝は徳川家康の説得で無血開城し、元和5(1619)年に廃城となりました。

## 広域図



## 詳細図



凡例	植木1号市民緑地
	玉縄城址特別緑地保全地区
	■ テーブル、ベンチ ※区域は概ねの位置です。

市民緑地名: 植木1号市民緑地(都市緑地法による)  
市民緑地の区域: 植木字植谷戸211番1、213番3、植木字相模陣425番3、425番11、425番56、425番57、425番66  
契約期間: 平成29(2017)年10月25日から  
令和19(2027)年10月24日まで

- ごみは持ち帰ってください。
- ペットの散歩にはリードをつけてください。
- 施設を大切にしてください。
- 火気の使用は禁止です。
- 園路・広場以外の場所に立ち入るのはやめてください。
- 土石を採取したり、動かさないでください。
- 植物などを持ち帰らないでください。
- 生き物を放したり、植物を植えたりしないでください。
- 土石を外から持ち込むのはやめてください。
- 危ないことや、他人の迷惑になることはやめてください。

お問い合わせ: 鎌倉市役所 公園課  
0467-23-3000 (代表)



ここが植木1号市民緑地で、ここを登ったところが太鼓櫓址





# あなたが見ているのは、玉縄城の本丸です。

玉縄城は標高50m~70m級の台地に五角形に土塁を盛りあげた堅牢な本丸城郭でした。五角形の底辺は本丸南の「大手門」、その南にも防衛のための堀と巨大な土塁が築かれ、北には「搦手」と堀があり、西には「くいちがいの曲輪」、東には諏訪壇、矢射場、そして出丸の蹴鞠場がありました。

さらに玉縄城を「総構え」からみると、南麓に池状遺構を持つ城主の館、東側に綱成の館址、七曲殿館址、西側に防衛拠点清水小路によって、構成されていることもわかりました。これらのことは、文化庁補助事業により7年間進めてきた30回のセミナー、現地踏査、市文化財課の発掘映像から分かってきたことです。



1960年の玉縄城本丸付近の写真



本丸南東からの眺め、七曲坂から龍寶寺山と鎌倉・六国見山・天國を望む

# 玉縄城 八幡

歴史トレイル 遺構案内

## 植木1号市民緑地(太鼓櫓址)

この「植木1号市民緑地」は、土地所有者の理解と協力を得て、地域住民に公開する市民緑地として、平成24(2012)年3月に設けられました。

この緑地は隣接する七曲坂と共に、玉縄城の一部である太鼓櫓址を中心に当時の様子がしのばれる遺構となっています。平成24年に設立した玉縄城緑地愛護会は、ここを訪れる方に自然豊かな遺構を楽しんでいただけるように、毎月、清掃や除草など緑地の美化作業を実施しています。



玉縄城鳥瞰図 大竹正芳:作画(©玉縄城址まちづくり会議)



市民緑地の美しい四季



市民緑地周辺の堀切



堀跡曲輪からみた堀切

看板制作:玉縄城址まちづくり会議(玉縄城緑地愛護会)  
この歴史トレイル案内は、公益信託 大成建設自然・歴史環境基金によるものです。



大手門址の反対側(北側)が搦手址



1960年の玉縄城本丸付近の写真





玉縄城鳥瞰図 大竹正芳:作画(©玉縄城址まちづくり会議)



ここが太鼓櫓址/説明板が立っている

 video







太鼓櫓跡と煙硝蔵跡周辺

### 七曲坂から太鼓櫓へ

急峻な地形の東側から玉縄城に入る登り口が七曲坂です。当時とは一部ルートが異なり、現在の道の2メートルほど上の斜面に城への旧道が一部残されています。七曲坂を登り切り左側の小高い台地が現在の植木1号市民緑地=太鼓櫓址です。

これらの城址遺構は玉縄城址まちづくり会議が保全整備を進めてきました。

### 太鼓櫓址と崖下にある煙硝蔵址

太鼓櫓址は南端が少し高くなっています。これは七曲坂旧道の切通（堀切の底道）を抑えるための櫓台です。太鼓櫓西側から見下ろすと小規模の平場群が階段状に展開しています。鉄砲の弾薬を貯蔵する「煙硝蔵」の址だと言われています。昔はここに相模陣へ下る小道がありました。相模陣からは大規模な御殿の庭園などが発掘され、そこは玉縄城の「城主の館」であったと考えられています。



この下が焰硝蔵址

[video](#)





「西側につくった門扉から階段を降り、焰硝蔵址の平場」に行けるように記されている

## 玉縄城の歴史遺構 — 焰硝蔵

ここには昔、焰硝蔵がありました。

焰硝蔵址とは玉縄城の太鼓櫓の南側斜面下に広がる、嘗ては武器弾薬庫があったとされる場所です。現在は中央の平場を除いて殆どが竹林に覆われ鎌倉市の緑地になっています。太鼓櫓市民緑地から見下ろすと、東側下に七曲りの旧道の堀切、南側下に焰硝蔵址の平場が望めます。

玉縄城址まちづくり会議は、平成26年11月から鎌倉市と現地調査を進めて、緑地の範囲、樹木の保全方法、作業路、階段、門扉の設置等についても協議の上、慎重に保全作業に当たってきました。倒木の整理、竹の伐採、在来種の植樹等、生物多様性豊かな樹木の回復を図りながら、玉縄城の歴史景観を復活させ、併せて歴史の森の活用をめざすボランティア活動を進めています。

西側につくった門扉から階段を降り、焰硝蔵址の平場に立ちますと、一気に玉縄城の遺構の雰囲気になります。南と西側斜面には竹林、東側には七曲の古道へ向う堀切が続いています。今は通れませんが、その切岸の崖際を右に折れ、東に向かって尾根伝いに行くと一本橋の掛った大切岸に出会うこともできます。

この焰硝蔵址は、太鼓櫓址と一体として玉縄城を偲ぶ歴史公園にふさわしい緑地であり、大切に次の世代に残していきたい貴重な歴史遺構です。



そこで焰硝蔵址を見下ろしたところ

 video





ここが西側につくった門扉/階段を降り、焰硝蔵址の平地に行けるといいうが、立ち入り禁止になっていた

[video](#)





この先が階段か・・・

 video





さて、ここは大手門址から南西に進んだ、陣屋坂を登り切った所で、正面の階段の上にも「玉縄城趾」碑が立っていた

[video](#)

次へ





これはその近くの第六天社(右手)と相模陣稲荷神社(左手)が鎮座する高台を見たところ/ここに円光寺曲輪があったと云う

[video](#)





相模陣稲荷神社への階段





相模陣稻荷神社

[video](#)





第六天社への階段









第六天社









ここがふわん坂/この筋から攻め上がってくる敵に警戒感を与えるよう、S字状に深く切り込まれた急傾斜の坂道となっている

[video](#)





このように狭くて曲がりくねっている





そこで振り返って見たところ

 video





こちらは久成寺





玉縄北条氏の家臣であった梅田秀長の開基により建立されたと云う/境内には上杉謙信の家系である長尾氏一族の墓があり、その中の一人、長尾定景は鎌倉幕府第三代将軍の源実朝を暗殺した公暁を討ち取った人物と云う





こんな説明板もあった





## 松平甚之助新兵衛内室の墓

天正十八年（一五九〇）四月玉繩城が落城した後、徳川家康はこの地玉繩領を代官松平甚右衛門正次におさめさせた、その居蹟は今の植木「陣屋」にあると伝えられる。その子松平甚之助新兵衛（駿河大納言忠長卿に仕えた人）の内室妙秋院日種の霊とその一族の祖霊を供養のため後裔にあたる松平甚之助久勝が元禄七<sub>二</sub>戌年五月朔日ここに墓を建てたものである。

相中留<sub>三</sub>記略より

昭和六十<sub>二</sub>壬午五月朔日

卅二世 日慈識



こちらは陣屋坂を下った辺りにある陣屋坂公園





この公園付近に城主の館があったと云う

## 池状遺構（玉縄城主の館址）

1990年、玉縄城本丸から「陣屋坂」を下り右側-本丸南麓-から巨大な池状遺構と館址が発掘されました。（陣屋坂公園は、その遺構のほんの一角につくられています）そして陣屋坂の左側尾根には、大規模な付帯施設も発掘されていることから、この池状遺構と館址は、現在では「玉縄城主の館址」と考えられています



江戸期の松平陣屋の下から出た戦国時代遺構  
堀・溝によって区画された館・池・庭園



1950年代の植木陣屋地区  
陣屋坂の西側に池状遺構と館 東側から付帯施設が発掘された



城主の館址は幅150m奥行き60m



城山からの水路と水受けも完備されていた



発掘された五輪塔



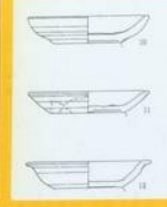
陣屋坂東側尾根の発掘調査地点



発掘調査の様子 出土した谷戸  
の遺構(かまどや石積み)の蔵



出土した美濃・瀬戸大窯製品





この公園のエリアから池状遺構が発掘されたらしい

[video](#)





こちらは本丸の東側下の植木に所在する諏訪神社/これは諏訪壇にあった諏訪神社がここに移され、関谷の御霊神社と合祀されたもの





神額には「諏訪・御霊両大神」と記されている



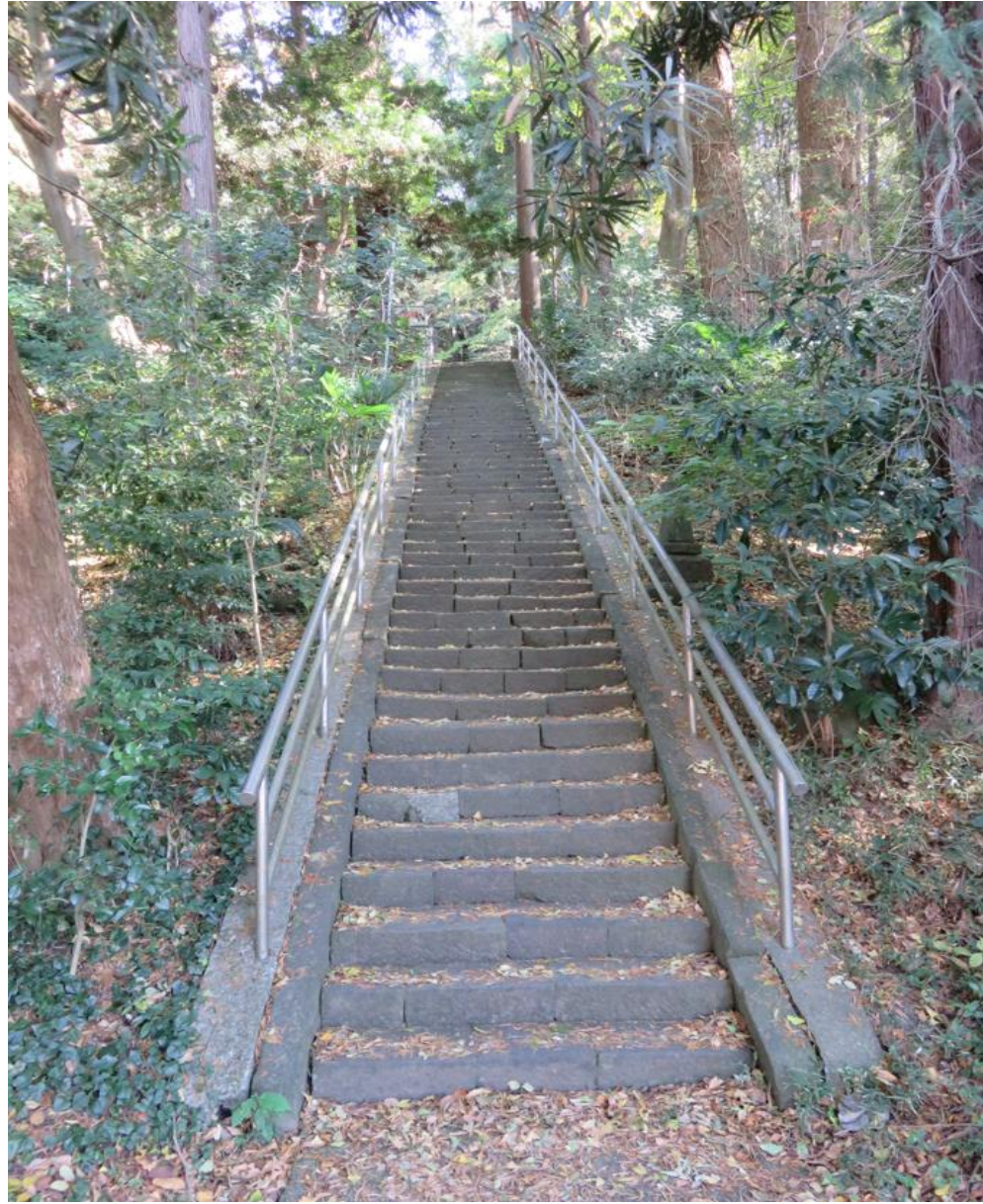


### 由緒書き




この由緒書きには以下のようなことが記されている  
『この神社は、今からおよそ420年前当時の玉縄城主  
北条綱成公が、玉縄城内の諏訪壇に勧請したものと  
伝えられている/元和年間玉縄城の廃城、さらに幾  
星霜を経て現在のこの位置に移された/北条綱成公は、  
黄八幡といわれた有名な武将であったが、天正15年  
73才で没した/公一門の墓は社殿脇の山頂にある』  
なお、この墓は現在の龍寶寺本堂の脇に「玉縄北条氏  
供養塔」として移設されている







諏訪神社社殿

 video









これはその近くにあった冠木門/植木小学校の正門らしい









次に二伝寺砦～龍寶寺城と進んでみよう



現地説明板を一部加工



ここが二伝寺

 video





左手に説明板が立っているのが見える





初代玉繩城主北条氏時の開基/浄土宗の大本山鎌倉光明寺に伝わる『本山伝』が紛失した時に、写しの伝書があったので二伝寺と呼ばれるようになったと伝えられている

## 戒法山 宝国院

# 二伝寺

当寺は戦国時代の永正二（一五〇五）年、玉繩城主 北条氏時の発願によって開山された寺です。開山にあたっては福原左衛門忠重の援助がありました。

当時は玉繩城から尾根つづきで地域で一番高い場所があり、加えて旧鎌倉街道に沿っていたので、玉繩城の砦の役割を担うために寺を創建し利用したと伝えられます。

開山当時、寺号は違うものでしたが、大本山光明寺に伝わる本山伝の伝書が紛失した時に当寺に本山伝の写し（二つ目の伝書）があったので二伝寺と呼ばれるようになったと伝えられています。



本堂/右手に説明板が立っているのが見える

 video







# 戒法山宝国院二傳寺

当寺は戦国時代の永正二(一五〇五)年、玉繩城主 北条氏時の発願によって開山された寺です。開山にあたっては福原左衛門忠重の援助がありました。

当時は玉繩城から尾根つづきで地域で番高い場所にあり、加えて旧鎌倉街道に沿っていたので、玉繩城の砦の役割を担うために寺を創建し利用したと考えられます。

開山当時、寺号は違うものでしたが、大本山光明寺に伝わる本山伝の伝書が紛失した時に、当寺に本山伝の写し(二つ目の伝書)があったので二伝寺と呼ばれるようになったと伝えられています。

## 松平正次一族の墓

玉繩城開城の後、徳川家康から屋敷を賜り渡内に住み玉繩城を守護したのが松平正次です。その後、玉繩城は廃城となりますが松平正次の子供たちが玉繩藩としてこの地を治めました。向かって右から松平正次、正次の内室、正吉、久次、正吉の子の順に宝篋印塔が並んでいます。

## 拝観図



## 平良文 (村岡五郎良文)

桓武天皇の四代あと、平高望の五男、東下りして村岡城に居を構え、村岡五郎と称しました。後に鎮守将軍に任ぜられ、坂東平氏の始祖と言われています。境内山頂に、初代平良文、二代忠光、三代忠通の塚があります。

## 幡随意白道上人

善行 松本家の出身で、当寺 範善義順のもと出家した浄土宗の高僧、京都百万遍知恩寺 三十三世の後、神田に新知恩寺幡随院を開山しています。晩年には徳川家康の命を受け、キリシタン改宗の為、九州地方に向い教化をしまし

た。開山した寺三十三ヶ寺弟子三十五名を教え、伝法においても幡随意流伝法をまよめています。

境内には、平安時代中期に鎮守将軍として東下りし、この近くの鎌倉郡村岡郷(村岡城)に入った平良文三代の塚や、北条氏滅亡後の玉繩城主松平正次一族の墓があるようだ





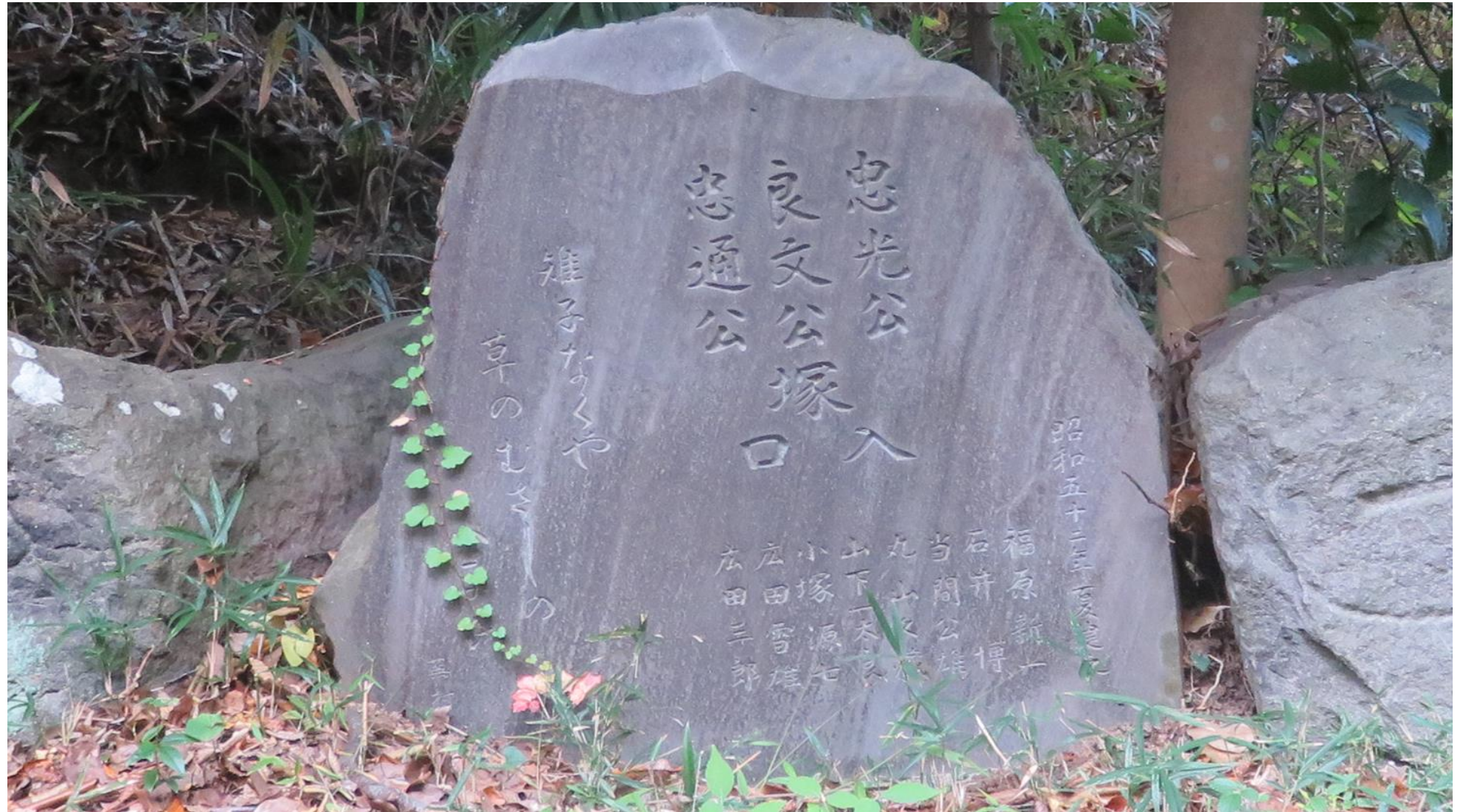


左手の階段を登るようだ/右手に行き先案内表示の石があった！

 video







忠光公 入  
良文公 塚 口  
忠通公

昭和五十二年夏竣工

福原新一  
石井博  
当間公雄  
丸山之次  
山下木良  
小塚源七  
広田雪雄  
広田三郎

雉子なくや  
草のむさしの



これが平良文の塚

 video





二代忠光の塚





三代忠通の塚





こちらは松平正次一族の墓





住宅地の隙間から二伝寺砦の一角を見たところ

[video](#)





さて、こちらは龍寶寺城のあった陽谷山龍寶寺/正面は山門

[video](#)









江戸時代元禄年間の建立と云う





玉繩城三代城主北条綱成が建立した寺院が始まりで、天正3年(1575年)に六代城主北条氏勝によって当地に移され、玉繩北条氏(小田原北条氏の分家)の菩提寺として栄え、七堂伽藍を備えた寺院であったが、小田原北条氏が滅亡するとともに衰え、その後、江戸時代の明和年間(1764年~1772年)に建物が再建されたと云う/建物は昭和26年に火災で焼失、現在の本堂は昭和35年に大岡實建築研究所の設計により再建されたもの/寺の名は、氏勝の父である北条氏繁の戒名「龍寶寺殿応栄公大居士」からとられたものらしい

- 宗派 曹洞宗
- 山号寺号 陽谷山龍宝寺
- 建立 16世紀中頃
- 開山 泰絮宗栄
- 開基 北条綱成



# 龍寶寺

Ryuhoji Temple

龍宝寺

류호지 절



本堂とシャクヤク  
Main Temple Hall and Peonies  
正殿与芍药  
본당과 작약

玉繩三代城主の北条綱成が建立した瑞光院ともいわれる香華院がこの寺のはじまりといわれ、玉繩北条氏の菩提寺として栄えました。本堂には、釈迦如来と脇侍の文殊・普賢菩薩がまつられており、玉繩歴代城主である北条綱成、北条氏繁、北条氏勝の位牌や源実朝の位牌も安置されています。また、境内には「正徳の治」を行ったことで知られる朱子学者の「新井白石の牌」があります。山門を入ったすぐ右側には、玉繩ふるさと館があり、その先には、もと関谷にあった江戸時代中期の民家である国指定重要文化財の旧石井家住宅があります。



「寺の前には植木新宿の城下町が続いていた」と記されている

## 鎌倉鎮護の名城 玉縄城

鎌倉に一つだけ城があります。1512年、鎌倉の玉縄に北条早雲（伊勢宗瑞）が築いた「玉縄城」です。早雲は荒廃しきっている鎌倉と八幡宮の再興を誓って、一首を奉納しました。

「枯るる樹に また花の木を植ゑ添へて もとの都になしてこそみめ」

※「枯るる樹」は、戦及で荒廃した鎌倉を表しており、それを復興し鎌倉時代は元の都にしてみせようという、強い決意がうかがえます。

この誓いを胸に早雲は、鎌倉鎮護の城、武田信玄や上杉謙信が侵攻を諦めたほどの難攻不落の玉縄城を築きました。その意志をついだ玉縄城主六代—北条氏時 北条為昌 北条綱成 北条氏繁 北条氏舜 北条氏勝は、いずれも文武両道の名君でした。

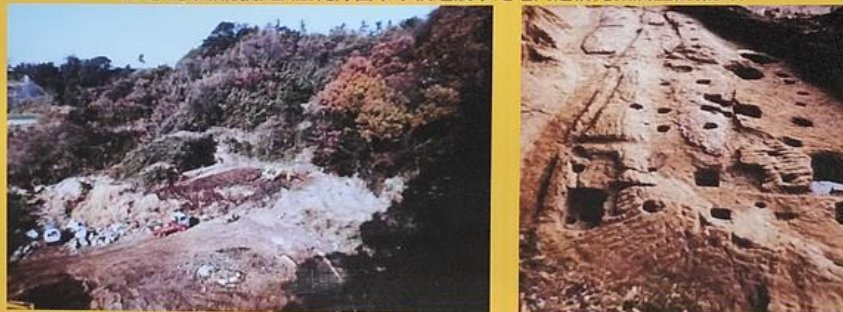


1960年西側からの航空写真

最新の考古学、城郭史学の研究で、鎌倉鎮護の玉縄城の素晴らしさが明らかになってきました。

- ◆「武ありて禪の人」早雲は民のための国造りをめざして築城した
- ◆玉縄城ほどの「敵物場」をもつ戦国の城は他にない
- ◆三代城主綱成の館址が推定できた
- ◆玉縄八幡宮が存在したことも推定
- ◆陣屋坂の池状遺構は都の文化を取り入れた「城主の館」である
- ◆後北条氏は荒廃した鎌倉と鶴岡八幡宮、佐両天神社を修復した
- ◆鎌倉鎮護の玉縄城、その堅固な「総構え」が明らかになった(右図)
- ◆早雲の民のための国造りの理念と手法は、最後の玉縄城主氏勝から徳川家康に引き継がれ、その結果鎌倉は江戸の古都になった

推定 北条綱成館址(玉縄方面小学校建設予定地内遺構発掘調査概報より)



この歴史トレイル案内は、公益信託 大成建設自然・歴史環境基金によるものです

## 玉縄城 八幡

歴史トレイル遺構案内

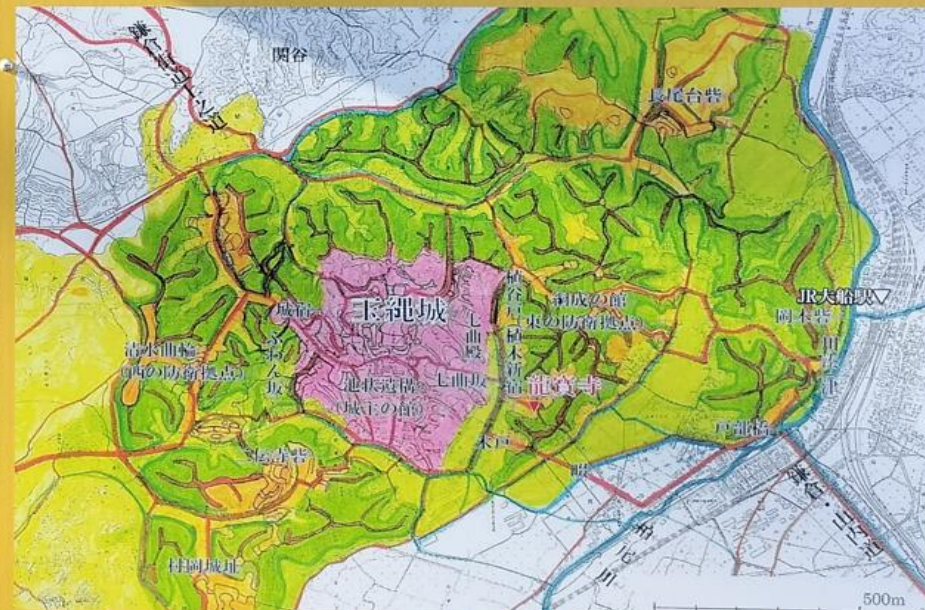
### 龍寶寺



植木村 龍寶寺

天保10年(1839)「相中留思記略」長谷川雪堤

龍寶寺は曹洞宗永平寺派の名刹、玉縄城主の菩提寺です。玉縄北条氏三代北条綱成が玉縄城の東北、山居(現在の栄光学園周辺)に「香花院」というお寺を建てたことが始まりでした。開山は泰崇宗榮大和尚、山号は陽谷山。元亀2年(1571)嫡男の氏繁に家督を譲った時のことです。天正6年(1578)四代城主北条氏繁がなくなり、六代城主北条氏勝が父を弔うため現在の地に移し、氏繁の戒名(龍寶寺殿応栄公大居士)から「龍寶寺」と改めて建立したのです。寺の前には植木新宿の城下町が続いていました。



ピンク=狭義の玉縄城域、オレンジ=外郭防御拠点、黄緑=総構山稜部、薄黄緑=総構平野部  
赤=道、青=河川 (昭和29年鎌倉市地形図使用) 作図:大竹正芳 ©玉縄城址まちづくり会議



江戸時代の儒学者であった新井白石の碑や国指定重要文化財の旧石井家住宅などがあるようだ/本堂及び鐘楼堂の設計者として大岡實(実)の名が見える

# 陽谷山龍寶寺 案内

宗派 曹洞宗

本尊 釈迦牟尼仏

開山 泰絮宗榮大和尚

開基 玉繩城主(北条綱成、氏勝)

本堂 木造銅葺重層入母屋造

(昭和三十五年建立) 設計 大岡実

山門 江戸時代元禄年間造

鐘楼堂 設計 大岡実

面山瑞方禅師の銘文記す

一、玉繩北条氏の供養塔

一、新井白石公の碑

一、金比羅宮 一、子育地藏尊堂

一、福德稻荷堂(天保年間造)

一、弁天堂 一、道祖神

一、玉繩ふるさと館

・旧石井家住宅(国重要文化財)

・歴史民俗資料館(鎌倉市指定)

平成二十七年三月 三十三世 鐵牛良光 代



前方が本堂/木造

 video



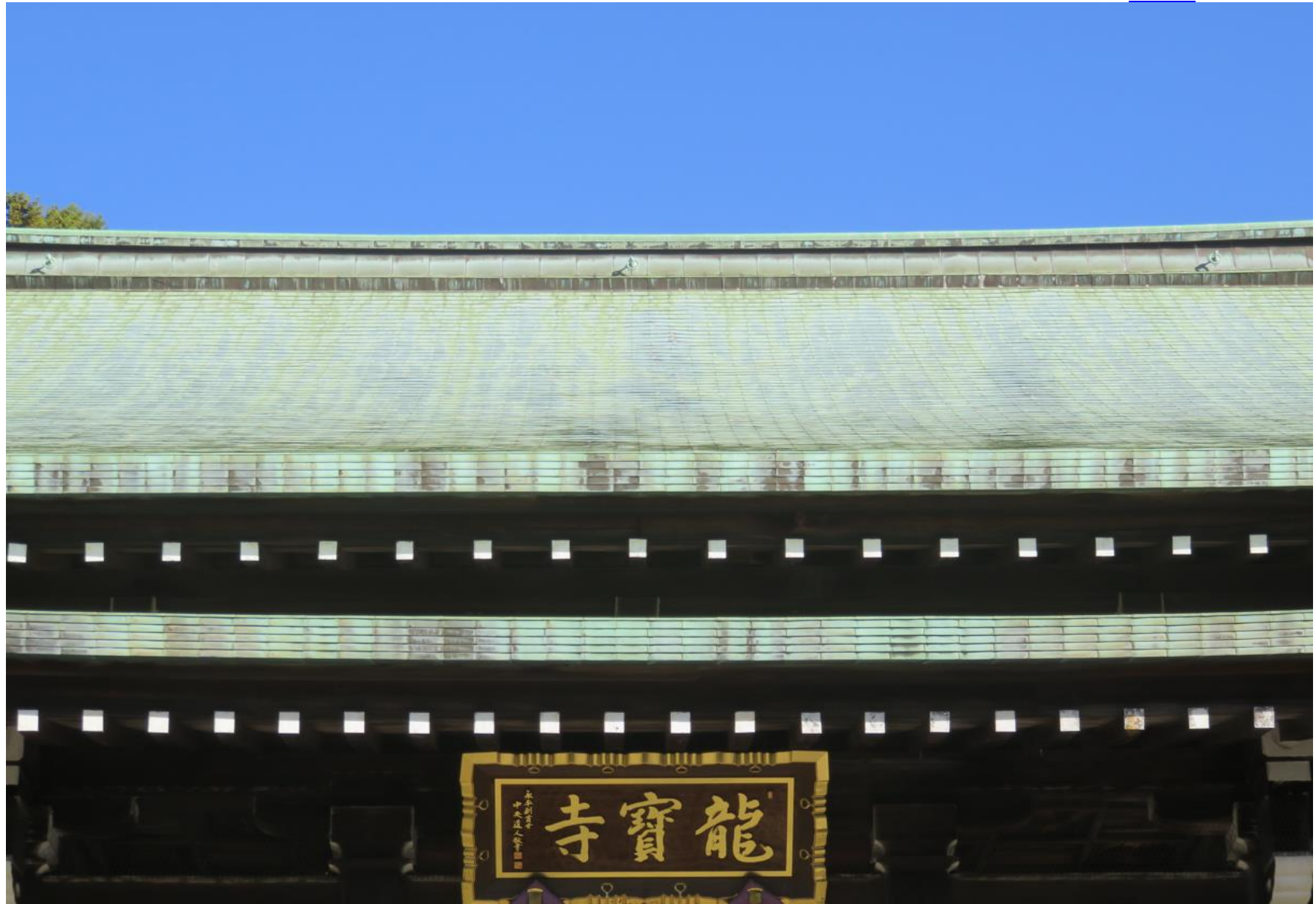














本堂の左脇には諏訪神社社殿脇の山頂にあったと云う「玉縄北条氏供養塔」があった





## 玉繩北条氏供養塔

永正九年（一五一二）伊勢宗瑞（通称北条早雲）が玉繩城を築城し、小田原城の支城として関東進出の重要な役目を果たしてきました。

戦乱の渦中に、その名を轟かせた北条綱成、氏繁、氏勝は玉繩城主としてよくこの地を治め、外に向かつては勇猛果敢に戦いました。

この供養塔は、龍寶寺住職四世良順大和尚が建てたものです。（推定元和年間、寛永五年頃）元は、現在の栄光学園の敷地内にありましたが、造成工事のため龍寶寺墓地裏の尾根上に移設しました。

この度、玉繩城築城五〇〇年を記念して参詣し易いこの地に再度移設しました。

なお、この供養塔は旧地に建っていた頃、いつも塔が倒れていて誰かが直しておくかとすぐにまた倒れているので土地の人は「ぶっけり仏」と呼んでいたとのことです。

平成二十四年五月吉日

供養塔説明板 寄贈

江上尚志 佐藤邦男  
澤野雅勝 椎野忠雄  
清田光治 関根 肇  
増川勇次郎 渡邊邦昌  
玉繩歴史の会  
玉繩桜をひろめる会







こちらが国指定重要文化財の旧石井家住宅







国重要  
文化財

旧石井家住宅



鎌倉から甲州に向かう関谷の街道沿いにあった地侍の子孫の旧家で、農家では鎌倉唯一の重要文化財で、17世紀後半頃の農家の「三間取り四方下家造り」を良く残していると云う

video

## 重要文化財旧石井家住宅

石井家は後北條時代の地侍から登したと伝えられる旧家で、近世はこの地の名主をつとめてきたと云う。この住宅は桁行七間半、梁間五間の規模をもった農家で、「四方下家造り」の構造からなり、平面は「ひろま」の奥に「でい」と「へや」が配される「三間取り」である。「ひろま」の前面にしし窓を付け、「でい」「へや」廻りも土壁塗りで閉鎖的で古式が感ぜられ、恐らく江戸中期の初頭を下らない頃（元禄時代）建立であろう。

石井家住宅は鎌倉から甲州に至る甲州街道筋である鎌倉市関谷一五七五（倉骨）にあったが、近年に至り建物が老朽化し取こわし建替することを菩提寺である龍寶寺現住職が、これを惜しみ、同寺に寄贈をうけて、境内に移築保存となつたものである。

この住宅は神奈川県下に例の多い「三間取り四方下家造り」の農家の典型で、様式手法より見て十七世紀の後半頃のものと同推察される。建築後の経過については明らかでないが、後世は生活の便宜から諸々に改造の跡も見られたが、しかし創柱、内部柱等の主要材のほとんどは当初のまま遺存して今日に至つたものである。

昭和四十四年六月二十日重要文化財に指定されて、昭和四十五年一月一日修理の工を起し、国庫補助金及び県費並に市費の補助金を得て工期九ヶ月をもつて修理を行った。

前述移築工事のため重要な建設位置の設定を初め、建物の解体と同時に入念に実測調査を行ない、更に修理に先立ち解体材の調査と後世改変の痕跡調査をして明確な資料にもとづいて文化庁の許可を得て現状変更を行ない、出来る限り当初の様式に復原整備した。



これはその傍にあった横穴で、やぐら、あるいは横井戸（横堀の井戸で、湧水の豊富な谷戸の崖地で時折見受けられると云う）のようだ





こちらは併設されている玉縄歴史館

[video](#)





これは展示されていた玉縄城跡の大手門の模型





これは大手門の礎石



玉繩城  
大手門礎石



さて、ここはJR大船駅西口近くにあった玉縄首塚





玉縄首塚の由来を記した石碑が立っている





1526年(大永6年)、安房の里見実堯が鎌倉に攻め込んだ際、玉縄城を守る北条氏時(北条氏綱の弟)は戸部川(柏尾川)べりに出て防戦したが、この戦いで北条方の兵36名が戦死/戦後、氏時が敵味方の首を交換してここに葬ったと伝えられている場所がここと云う





